

## 大学教育総合センターニュース

---

- # 4月8日の入学式と共に、平成14年度のスタートです。9日、10日、11日と新入生ガイダンスが続き、12日から新年度の授業が始まりました。新入生の皆さんにとってはたいへん慌ただしい大学生活の始まりです。
- # 平成14年度より、大学教育総合センターは文部科学省の省令施設になりました。このことにより、本センターは本学における教育の質的向上を担う中核的部局として正式に認知されたこととなります。平成16年度からの国立大学法人への移行が現実視されるなか、教育は大学に課された責務の柱としてますますの充実を求められています。今回の措置はこのことをはっきりと伝えるものとも受け取れます。
- # 大学教育総合センターでは省令施設化の内示があった時点から、本センターに課される責務の大きさを強く自覚し、ワーキンググループを設けて、付託されるであろう任務を全うするにはいかなる組織であるべきかについて徹底した検討を重ねました。その結論が本号に掲載する組織図です。
- # 組織はしかし人によって動きます。目的意識を共有したスタッフが一致して事に当たる必要があります。組織が大きくなったため、新体制が固まるまで若干の期間を要しましたが、新しいメンバーが別掲のように確定し、鋭意、活動を開始しました。
- # 大学教育総合センターと時を同じくして、留学生センターも省令施設として発足しました。このことを記念して、4月24日、両センターの開所式が行われました。式典の後、古城紀雄氏（大阪大学留学生センター教授）による「留学生の多様化と異文化交流－21世紀の大学における国際交流を考える－」と題した講演が行われました。教育総合センターとしても本学教育のグローバル化は重要課題ですから、多くの示唆を与えられた内容でした。
- # 4月は新入学生にとってばかりでなく、新しく本学に赴任された教員にとっても、新たな出発の時です。慣れない環境における新しい仕事の始まりは、どうしてもストレスが伴うものです。大学教育総合センターでは、共通教育に関わる業務について早めにご理解いただくために、4月25日午後3時より新任教員の方に集まっていたいただき、共通教育についての説明会を開催しました。十分な時間をとれませんでしたので、西頭センター長と山本副センター長による概略的な説明にとどまりましたが、その主旨をご理解いただき、所属学部の業務と同様、共通教育にもご尽力いただける予感を抱かされたひとときでした。
- # 本センターのリニューアルと共に「センターだより」もリニューアルします。次号（第4号）からは隔月刊行とし、よりスリムに、より機動的に、有益なニュースをお届けすることになります。
- # 大学教育総合センターのホームページが完成しました。「成長するホームページ」を目指します。掲載してほしい情報などアイデアをお寄せ下さい。  
ホームページアドレス <http://www.iec.ehime-u.ac.jp/iecweb>  
ホームページ管理担当者：佐藤浩章（センターシステム開発部） [sato@iec.ehime-u.ac.jp](mailto:sato@iec.ehime-u.ac.jp)

## 特集1：学生の視点から見た共通教育

### －鮎川学長と学生広報モニターとの座談会

去る2002年1月31日、学長室において、「学生の視点から見た共通教育」というテーマで、鮎川学長と学生広報モニターとの座談会を開催しました。出席者は、学生モニターから9人、教職員から7人(鮎川学長、西頭センター長、山本副センター長、高松、河野、松久各センター教員、清水教務課職員、以下敬称略)で行われました。鮎川学長の大学時代の学習方法についての話や、学生からの活発な意見など読みどころたっぷりの座談会となっています。これらの内容は、今後センターの活動の方針に活かしていきたいと考えています。

#### 学生広報モニター出席者（学年は当時のもの）

二宮 奈々さん（理学部物質理学科一回生） 豊田 ゆかさん（理学部物質理学科二回生）  
清水 麻未さん（医学部看護学科一回生） 笠井紗綾香さん（法文学部人文学科一回生）  
久田 英男さん（教育学部学校教員養成課程一回生）  
宮田 剛さん（教育学部学校教員養成課程一回生）  
江越 貴広さん（工学部情報工学科一回生） 戸成 晃子さん（法文学部総合政策学科二回生）  
山村 昌弘さん（工学部応用科学科二回生）

#### 全部抜けてしまった教養教育

司会 「それでは、まず学長のほうから、愛媛大学として共通教育について、どんなふうを考えているのか、という基本的なところを話していただいて、それについての質問などをしていただきながら、具体的にどんどん聞いていただければと思います。」

鮎川 「はい、分かりました。私自身の経験から、まず話してみたいなと思うんですけど、おそらく皆さんも同じような感じかも知れないけど、私らの時はもっと教養教育の縛りがきつくて、必修科目の単位がたくさん有りました。その中で自由に選ぶことができるんですけど、興味のあるものは取りますよね。その他に、取らなきゃいけないかったら、おそらくこれも皆さんと同じだと思うけど、人の噂を聞いて単位の取りやすいものがどれかいなと考えてそれから、なんかおもしろそうなのはなんかないな、ということを考えたりして取

りました。それから後の私の経験から、これがここに役に立ったとハッキリと言えるものは、今無いように思えます。今無いんだけど、今から振り返ってみたら、外にもっと広い世界があるよとか、それからもっと違った考え方があるよということについては、後になればなるほど役にきたなと思っています。それともう1つは、私は理学部に入ったんですけど、もともと数学とか物理とか好きだったんだけど、人文系の話聞いてみたら全然違う学問の筋道、やり方があるということ、頭の考え方、整理の仕方というものがずいぶん役に立ったのかなと思うんです。その時習った知識は、先生には申し訳ないけど、冗談話は全部覚えてるけれど、習った知識は、ほとんど抜けています。抜けているんだけど、どこでそういう知識を求めたらいいのか、どんな本を読めばいいのか、どういうふうに勉強したら

いいのか、と言うふうなことはずいぶん勉強させてもらったな、と思うんです。」

### 新しい学問の創造の糧としての教養教育

鮎川 「私はもともと理学部を出て、工学部の機械を専攻しました。そして、専門は水とか空気のような流体をやっていました。一番皆が分かりやすい話にすれば泥水、だから水の中に物がいっぱい入っているような物の流れと、これは混相流というんですけれど、をやり始めたんです。これは、あまりやられてない学問でしたが、その当時は非常に炭鉱が盛んで、ものすごく必要という時代でした。昭和30年代ですから、あなたのおじいちゃんらの年代です。石炭なんかを運ぶのに、粉にしてパイプで運んだらよっぽどいいじゃないのと言う話が出て、そのことからやり始めたのです。

その問題をやり始めた時に、そういうもと同じ流れっていうのはいっぱいあるやないかということを考えてんですよ。人間の血液の流れの中には赤血球も有れば白血球も有るし、やっとなるのは同じやないか、と言うことです。それから川の流れなんかも砂がいっぱい混じって同じやないかと。それからナノメーター程度の粒子を混ぜて、液体が磁石みたいに動く、そんなふうな流れもあるやないか、ということでそれを全部1つに集めた形で『混相流学』という学問ができないのかと何人かの人たちと話しました。他の研究者たちと新しい学会を始めたんですよ。まだその『混相流学』はできてないんだけど、最近、国際シンポジウムが盛んに開かれる。それも第一回、第二回は日本でシンポジウムを開くということがあったわけです。

そういうことをみんなと話してみよ

うと思ったのは教養でいろんな世界を見せてもらったということが、一つあるだろうと思うんですよ。だから、泥水と血液が、パッと結びついてくるとか言うふうなことですね。」

### 広い視野でものを考えるということ

鮎川 「先ほどの石炭とか資源とかの輸送の話なんかで、例えば、南アフリカに資源があるとして、それをどうやって運ぶのという議論がある。そしたらタンカーで運ぼうか、その時はコストはいくらかかるのか、そんな議論をする時に、コストなんてのは物理研究者には全然わかんないけれど、教養の経済でそういうことを習ってたから、どの先生に聞きに行ったらいいのか、というふうな発想は自分もできてきたなと思うんです。工学の分野からすると、広い見方をもってたほうが、得だったかなあとと思います。何を探したらいいのか、その課題を解決するのにどんな知識を探したらいいのか、誰に相談したらいいのかという時もかなり教養で習った話は役に立ったのかな。授業の中で、偉い先生の名前なんか出てくるでしょ、そうするとあの辺の大学やったらこんな研究をやっているのかなと考えたこともあります。そういうことで教養の共通教育のテーマの大事なことの1つとして、私がよく入学式で言うのは、豊かな人間性ということと、広い視野なんです。」

### 「頭の引き出しづくり」と「知識と知識のつながり」

鮎川 「私はよく、頭の引き出し、という話をするんです。頭の引き出しに知識を詰め込んだら、すぐパンクします。私は不精だったから、覚えることはできるだけ少なくする、というのが高等学校の時から目標だったのです。覚え



鮎川学長

ることを一番少なくするという  
ことで、一番失敗したのは語学。だから英語は今でも難儀なんです。文法で解決すれば何とかかなるという感じを持ってたんですよ。あの時にもっと単語を覚えとけばよかったなと今では思ってますけど。この覚えることを少なくするにはどうしたらいいかと言うと、知識がこれとこれとはどうつながるか、ということ、これは『学問の体系』というふうに言いますが、これが非常に大事です。

私が最高の体系かなと思っているのはニュートンの力学なんです。宇宙の話から、鉛筆の転がる話から、全部一つにまとめられると言うすごいものだと思います。そういった体系化がものすごく大事だと思います。高等学校の先生に、『歴史は覚えるものじゃない』とまず言われたのです。『大事な年号を10か20覚えとけばよろしい。後は流れを知りなさい』と言われた。僕がどうやったかと言えば、日本史の年表作って、世界史の年表作って、東洋史の年表作ってそれをいっしょにやったら全体の流れがよく分るわけですよ。

専門の人は一つの体系、流れを作っていて、知識のつながりがどうなのかということをしつかりと把握すれば、頭の引き出しはいっぱいにならな

いですむだろう。知識はいろいろ習いますけども、その体系を説明できることになったら、もういらん知識は捨てていけばよろしい、ということだろうと思います。それで、ことに教養教育の場合にはさっきも申し上げたことなんですけど、『どこに知識を探しに行ったらあるのか』、『誰に聞けばあるのか』という『知識の在り処探し』のためにはものすごく役に立つことだろうなというふうに考えているわけです。』

### 後になって役立つ教養教育

鮎川 「教養教育は始めいらんなあとでも、後で必要になる。後になったら役に立ったなと思う。私は十数年前に、この教養教育の担当の仕事してて、アンケートとったことがあるんです。そして共通教育についてどう思うか、役に立つと思うかどうかということで、アンケートとったら大学生は『あれは通過儀礼であって役に立たない』と言うのがものすごく多かった。ところが、卒業した人は80%が役に立ったということを書いてる。そういう性格のもんだろうなと私は思ってます。今後、将来生きて行くために重要になるということは理解してほしい。そのために我々はやっていると思ってます。ですから、今興味があるものでなくて単位が取りやすいということがモチベーションだったとしても、僕は別にかまわないと思う。ただ、同じ学問を取るよりは、できるだけ広いものを取りなさい。単位を取りやすいのがたくさんあったらそれでもいいから取りなさいと、そして、行って見て、そしてさぼらないで、ずっとむしろ楽しむつもりで勉強しても、きっとおそらく将来には役に立ちますよと申し上げたい。』



座談会の様子

### 学部開講科目はどう取ればいいのか？

司会 「鮎川先生の講義というのは初めて受けました（笑）。大変興味深く聞いたんですけど、今、現役の一回生、二回生で、もうちょっと聞いておきたいことがありますか。」

山村 「他の専門以外の勉強、他学部の授業でも、取っておいたほうがいいでしょうか。」

鮎川 「他学部の授業を聞きに行くとしたら、かなり専門的な教育になってしまう。おそらく入りきらないものがあるだろう。それと、他学部に関心に行くという時には自分が、好きなものしか聞きに行かないということも出てくるだろうと思います。今でも専門性があまり高くなくて、教養教育として非常に役に立つようなものを開放科目と言う形で聞けるような形を取っています。出来るだけ広く聞けるようなことを今後考えていく必要があると思っています。」

### 担当教員はどうやって決まるの？

久田 「共通教育の科目帯はどういう流れで、決められているんですか。」

松久 「月曜日の1限目がA科目帯。A科目帯からH科目帯までありまして、その科目帯の中に複数の主題別科目があります。時間帯の中にどういうふうになっているんな先生をはめ込んでいくのか

ということですが、教室の数が限られているのと、それから、教室の机の数が限られているということにあわせて、1つの授業の中で1つの時間の中でいくつまでしか開講することが出来ないという制約がまず条件としてあるわけです。そこにどうはめ込むかという時に、なるべくこの5つの主題別科目を出来るだけバランスよく開講していくというやり方を取るんです。共通教育を企画する部会があって、バランスよく配置しようかと相談するんですね。だいたい3ヶ月ぐらいかけて、議論するんです。結果として、バランスをとることがまず第一になってまして、一人一人の学生さんが自分で履修しようとする時に、科目帯によって、自分が受けた科目の数にばらつきがあるということが結果的にどうしても生じます。おそらくそのことを指摘してくれてるのかなと思うんですけど、『うまく選べない』、『選ぶ機会がどうも不当じゃないか』ということでしょうか。」

宮田 「さっき学長が共通教育のお話をされたじゃないですか。その体験談や理念に反論することはあまりないです。共通教育のコマ数は、学部ごとに暗黙のうちに割り当てられているということをお聞きしたことがあるんですが。」

鮎川 「あーなるほど。まずお話ししておきたいのが、去年の四月から大学教育総合センターを学内で作りまして、その時から、全学部の教官が共通教育を持ちましょうということをやっています。」

宮田 「それは登録ですか？」

鮎川 「登録してもらって、それぞれの持っている財産を皆にできるだけ広く出そうよということで進めています。」

松久 「昔は、そういう割り当てがあったんです。それがあったためにどうして

も、開講される科目が限られるでしょう。どうしても偏りが出てきますよね。これではちょっとまずいんじゃないか。できるだけ愛媛大学にはたくさん先生がいますので、そういう先生方にも、一回生・二回生の皆さんに、話を聞かせてくださいよといった形で全員でやりましょうとなっています。必要な科目数がほしい主題別科目にすると300から350程度なんです。ほしいそれくらいの科目を全学の人達という格好でやっています。」

鮎川 「この先生評判ええから、あんた一週間全部やんなさいよというわけにはいかない。その先生も研究があるし、専門的教育もあるし、だから、そのへんのこと一生懸命考えながら、調整してもらおう。」

西頭 「昔は教養部ってのがあって、そこに先生が80人いて、その先生が共通教育を担当してたんです。他の先生方はやってなかった。だからいろいろ限界があるわけですよ。ところが今年の4月からは、医学部も含めて、全学出動ということで1,000名の先生がいるわけね。だから80名と1,000名じゃ全然違うのよ。バラエティの人が皆いるわけでしょ。皆に私はこれが出来ますよと登録してもらおう。今度こういう主題別科目を作りましょうという時には、登録したものを委員会でいろいろ検討し



宮田さん

て構成するわけです。」

宮田 「その登録は、全教授しなくちゃいけないんですか？」

西頭 「全教授、助教授、それから講師。」

### ファカルティ・ディベロップメントという制度

宮田 「もし仮に、ある教授が、共通やりたくないから、登録しなかったケースとかあるんですか？」

西頭 「ありません。全部出していただきます。出さない場合は、学長からお叱りを受けると(笑)。」

鮎川 「いい教育するためにセンターの中にはシステム開発部も作って、毎年毎年、どんどんもっともっとやれる、やりやすいように変えていこうという動き方をしている。」

西頭 「大学教育総合センターと書いてあるでしょう。『総合』っていうのはどういうことかと言うと、教育計画を立てる、実施する、実施後の講義のあり方を改善する。先生方の教え方の研究をする部門もある。だから共通教育を全体的に、総合的に実施するということです。」

宮田 「担当教員を決める時の判断基準とかはありますか？」

西頭 「そういう意味で、皆さんにアンケートとってますね。で、今日もこうやって集ってもらい、意見を出していただく。そして計画する時にそういう意見を反映して、いいものにしようということです。」

松久 「例えば、留学が決まっているとかいうようなケースは、委員会でその代わりをどうしようかという相談をして、穴埋めをいろいろ考えるんですね。」

西頭 「医学部の先生なら手術とかいろいろあるでしょう。そういうのはちゃんと考慮します。ただ、嫌だからやりたくないっていうのはダメですよと、そう

いうことです。」

高松 「今の質問は、何か感じてそう質問されたんですか。共通教育の主題別科目を皆さんに提供していますよね。教官がなんかどっか嫌々してるんじゃないかという感じがあったのかなと思ったんですけど（笑）。」

宮田 「それも少しあるかと思います。だから、教養教育の担当を断れないわけですよ。たてまえ上は各教授、全員出勤。でも、共通教育、しかも1限に多いから来たくないわ、僕は専門の研究に打ち込みたいっていう教授もおると思うんですよ。で、逆もあると思うんですよ。その時にちょっと疑問に思ってます。」

西頭 「そういう時は堂々とね、授業開始の時に言ってください。先生、もうちょっとまじめにやれと（笑）。」

宮田 「言える人はたぶんええと思うんですけど、言えないような人もおるし。単位もらう側ですから。言いにくい雰囲気っていうのもあると思うんですよ。」

西頭 「今度の新しい総合センターでは、学生の意見も我々の方からも、自由に話せるような雰囲気を作っていきたいという理想を持っていますんで、だから皆さんも遠慮なく言ってください。センターの運営に、皆さんも若干関わっていただくようなモニター制度も作ったわけです。」



西頭センター長

松久 「授業評価アンケートやるでしょ。あれはやってもなかなか改善しないよっていう声も正直言ってあったのね。それも今検討してて、言いたい事があれば自由に書いてもらえるし、書いてもらったことは改善の一つに具体的にに向けていこうという話をしていこうというところですよ。」

鮎川 「FD、つまりファカルティ・ディベロップメントっていうんですけど、教員の力量向上のための研修です。大学にとって学生さんの教育っていうのはすごく大事だよということを皆が思ってくれば、嫌な顔もしなくなるわけです。だから、そのために先生方に意識を持ってもらうこともセンターの中で進めています。だからこないだもシンポジウムやったりして、あのシンポジウムに来とられた学生さんもおったよね。それで、自分がどんな講義をやって、どんな問題点があったということをお互いに交換するというのをしていくと、どんどん講義も変わってくるだろうなと、我々期待しているわけです。」

### 大学外での学びを

戸成 「豊かな人間性、広い視野を持つというのが、共通教育の大きなテーマだと思うんですけど、大学の先生を総動員するのもいいと思うんですけど、学校の外へ出て行って物を見るっていうのもいいかなあと思いました。法文学部の総合政策では、公共政策コースと社会経営コースには必修で、フィールドワークっていうのがあるんですけど、今回はボランティアを实际なさってる方が講師をしたり、新聞社の方が講師をしたりで、こっちからいろんなところを見に出かけて行くというのをやったんです。共通教育でそういう形をするのは、学生の方も金銭的な面もあつ

て難しいと思うんですけど、いろんなものを見て、面白いかなと思います。一般の現場の人たちの声を実際に聞かっていうのもいいんじゃないかなと思ってます。」

鮎川 「非常に大事なことやと思うんですよ。今一つ言われているのは、インターンシップです。実際に企業に行くとか、社会の人のいろんな話を聞く。それは、自分の将来の職業観もできるし、非常に良いということで、今はインターンシップは共通教育というよりも、学科で進めているところが多いんじゃないかなと思うんです。私は工学部やったから、よく言ってるのは、もっと学生さんに手を動かしてもらって今まで体験したことのないようなことをしてもらって下さいということなんです。この前、のこぎりを引いたことがないのが50%おったというようなことも聞いて、びっくりしたんやけども、そしたらそういうこともやってもらおうやないかと思ってます。共通教育の中ではどうなってるんですか。」

松久 「学外での学習については、専門学部の方で先行してやっていて、すごく効果あるので共通教育でもやりたいという計画を立ててくれている先生もいるんですよ。それで、いくつかは、実施するんですけど、難しいこととして、お金の問題がありましてですね。外に出て行ってどっかでそういうことをやろうとすると、バス代、施設使用料、宿泊費などがかかる。その財政的な基盤をいかに確立するかということがまだできてないんです。」

高松 「そうですね。例えば15回あるうちの2回位を、どこかへ行きたいと、そういうふうな授業をしたいと言う先生が何人かいらっしゃるんです。全部を採用しようということになって、何

件か私達がこれは必然性があるというような形の授業科目については認めたいんです。ただ、このセンターとしてはこのような授業を、今後どう位置付けるかという基本理念が固まっていません。こういうふうな授業だったら、こういうふうな予算にしますから、こういうふうな授業をどうぞ考えてくださいという基準を出せるようにしたいかなと思ってます。」

鮎川 「大学で最近、色んな講演会とかシンポジウムとか盛んにやってるんですよ。そういうのにも学生さんがたくさん来てくれたら嬉しいかなと思うんですけど。お客さんが少なかったりもするしね。それも1つの勉強になるんじゃないかな。是非、また参加してください。」

#### 授業方法の研究はしてますか？

清水 「共通教育のシステムが今年度は新しくなっているということで、先生の学生への指導を具体的には研究されてないんですか？」

鮎川 「山本先生の担当ですね。」

山本 「えーっと。難しい質問ですね(笑)。それが、ぱっと決まっていればそんなに苦労はしないんです。大学の授業というのは内容とか形態がすごく多様ですから、モデルというのはないわけですよ。私にとって良い授業と、他の先生にとって良い授業というのは、全然



左から清水さん、笠井さん、久田さん



違う。ですから、それぞれの先生方が自分のその専門とか内容とかを踏まえて、それを工夫して頂きたい。ただし、FD活動としては、良い授業をすることが必要だとか、良くなることは正しいことだ、そう思って頂くことがまず最初に必要で、そのためにいろんな仕掛け、試みをやっている最中です。例えば、そういうことに詳しい人に来て頂いて話を聞く。それから先生方が集まって、私はこのような工夫をしていますと、交流しあったりですね。それから、泊り込んでですね、教育を良くするにはどうするかという議論をやっています。」

鮎川 「大学の講義に、高校と同じように指導要領があったんでは、大学の講義にはならない。多様性を持つてるほうが非常に良くて、それぞれの持っている多様性をどう高めていくかという努力が私はFDの活動だと思っています。」

### 白紙から始める授業

久田 「のこぎりを使ったことがない人がおってびっくりしたとかってのがあったんですけど、そういうのは小・中までで徹底するべきで、大学ってというのは頭を鍛える必要があるのではないのでしょうか。だから、共通教育とかでも、先生達がどう工夫して、どう仕掛けをすとかじゃなくて、学生がもっと活発に学べる授業はどうでしょう。僕の場合なんですけども、学生達で白紙の状態を授業を展開してみたらどうかと。」

鮎川 「非常に良い提案だなあと感じますよ。一昨年から、学生による調査・研究プロジェクトを始めました。学生さんが自分でやってみたいことについては自分で研究しなさいよ、沢山のお金ではないですけど、お金も支援します

よということで皆さんにプロジェクトを出してもらって、7件ぐらいを選びました。去年は発表会もやりました。ただし、それは卒業研究とか研究テーマはだめということでやってもらってるんです。今、おっしゃるような、自分らで授業をやるというのはね、僕ら学生の時に教養時代ではよくやってたんですよ。何人かで本を読もうやって。先生にこんなことやりたいって言って。これは単位にはならないよ。ならないけども、あれは随分勉強になった。

だから、今のような提案は、1つは学生同士でもっとやって欲しい。1つの本を皆で読むだけでも随分違う。お互いに勉強しあうだけでも随分違う。これは自主的にやってほしい。それからもう1つは、学生さんにどんどん当たって、発表してもらうことを主体にした講義もこれからは期待しているんです。ひとつのトレーニングとして大事なことだと思っています。」

松久 「主題別科目のうち、5つぐらいずつ、毎年学生さんが応募して、こういう科目を展開したいと要望することも面白い。さっき学長が言われたのは研究面での支援だったけども、授業でもグループを作って設定してみる。学生さんだけでやると様子が分からないから、そのテーマに応じた先生に入ってもらって単位として認める。さっき学長がおっしゃったみたいな感じは、まったく私的なサークルになります。久田君が言ったのはちょっと違う感じで、もっと公的な単位を出すようなものがあるんじゃないかという提案だったと思うんですけど、それは大変面白い。」

西頭 「面白いですね。今、皆さんが受けているのは、一方的な講義ですよ。先生が来て、教壇でばーっと喋る、皆は黙って聞いている。そうじゃなくて、今

は世界的な動きなんだけど、双方向でお互いに意見を言い合う、一種のディベート方式の講義に、愛媛大学の共通教育を変えていかないかと思うんですよ。先生が5回ぐらい講義をやった後は、学生がその意見に対して論理的に話してお互いに意見交換するという形にしていく必要があると思っています。大変良い提案です。単位ももらえて、自分達の意見も言える。そういう方式のものを。」

松久 「勉強したいことができる。それが一番。」

西頭 「で、場合によってはさっきの話じゃないけど、これはフィールドでやりましょうよ、という話になればもっとすばらしいですね。」

久田 「なんで、そんなん考えついたかっていうと、僕はその共通でしか色んな学部の人たちと会えないんです。」

### 履修ガイダンスは必要か？

松久 「主題別ってまったく自由選択でしょう。こんなものを採ったほうが良いですよということを学校でガイダンスしてほしいですか。」

西頭 「履修指導ってやつですね」

久田 「個人的にはいらないです。」

高松 「まったく自由が良い？」

久田 「はい。多分疑問に思えば聞きに行くと思うんですよ。学生っていうのはそうしなさいって言われたら…。」

西頭 「そうしなさいって言われたら、これは違うよって感じでしょうね。」

久田 「そうですね。」

高松 「ただ、人数が非常に偏る。どういうふうな理由でその科目を選んだのかを見ると、シラバスが一番多い。」

松久 「シラバスを見てというのと、単位がとりやすそうだというのも結構多いんですよ。単位がとりやすいというのが絶対条件で、その中からシラバスで良

さそうなのを選ぶと、ある先生が話してましたよ（笑）。」

戸成 「履修指導っていうのは、何らかの形でどこからか伝わってきます。例えば、一回生のときでも専門の授業があって、『共通教育のときにはできれば将来につながるようなのをとるように』と、言われるんです。それは選ぶときの参考になってしまいます。」

西頭 「そういう指導をあんまりやっちゃうと、教養の意味がなくなっちゃう。」

鮎川 「私がさっき言ったこととは違ってくる。これだと基礎教育になりますよね。」

### 人数調整もしています

鮎川 「総合センターとしてはなるべくしばらないという方針でやっています。ただし、ある講義は400人、あるところは5人くらいしかいないというアンバランスも出ているわけね。」

久田 「人数調節もしますよね。最悪そうなった場合には。」

松久 「来年からは200人までを上限として人数制限をします。」

西頭 「400人では授業にならない。国立大学の意味がないね。」

戸成 「新しくなる前の授業を受けているので、あの時に思ったのは、人数が多すぎて何が何やらってということがありました。例えば広い教室、共通教育11番の教室だったりしたら、後ろまでが遠くて、うるさくて前のほうでしか聞こえない。単位をとりに来てるだけという感じがあったんで、今後どうなっていくのかなってという期待はあります。」

### 目玉の英語教育の反応は？

西頭 「私の方から質問ですけどね、今度の改革で一番大きな目玉は英語教育なんですよ。」

戸成 「あれは羨ましいと思いました。」

西頭 「1回生の方は実際受けてみてどうですか?どんな感じ?正直なところ」  
笠井 「高校や塾と違っていて。皆は楽しいと言ってます。」  
江越 「会話中心なので僕も楽しくやっています。楽しみです。」  
西頭 「高校では受験英語しか教えていないの?」  
江越 「英文解釈が中心です。今は英語のネイティブの先生がよく喋ってくれて面白い人です。」  
西頭 「20人は、真ん中で割った人数ですよ。そうすると、他学部とかこれまで付き合いがあんまりない友達ができたりしますか。」  
江越 「はい。なります。」  
清水 「私は医学部看護科なんですけど、他の学部では他学部と混ざって英語を受けてますが、なんで看護科だけが別々なんですか。」  
河野 「時間割と距離の問題ですね。ということでF帯とかG帯とかいうところがかたまってますよね。」

### 移動が大変

清水 「朝だけこちらで講義を受けて、あと午後3・4限目は重信に移動して受けなきゃいけない。松山に住んでいる人と重信に一回生のときから住んでいる人と、移動がすごく大変で、水曜日は全部松山か重信で講義を受けるかどちらかに決めて欲しいです。」  
河野 「専門をいれなければいけないし、それと共通教育とどう組み合わせるかっていうふうなことで、難しいですね。」  
清水 「バランスが取れない場合は、私は専門のほうを重視して、共通はできる範囲でやればいいのかと思います。」  
河野 「どうして?」  
清水 「共通教育も受けてるんですよ。でも

先生方が一方的に喋るだけで終わって、受けているって感じがしないんです。中にはただ来て出席をとってるだけの先生がいて、お金を払ってまで共通教育を受ける意義が見出せない。生徒と先生のディスカッションという形でないなら、専門に力を入れたいという意見が多かったです。」

西頭 「さっきも言ったようにディベート方式をどんどん動かしていくというのがセンターの方針です。今の話は物理的な話だから検討してみましょうね。」  
清水 「はい、お願いします」  
久田 「先生の移動はないんですか?」  
西頭 「移動してます。例えば医学部の先生はこちらへ来て、理学部の先生がこちらで数学や物理を教えたり。」  
河野 「教官も半日がけで、私なんて一日に二回往復をするなんてこともあります。」  
戸成 「移動という話で、共通教育の中にスポーツが含まれているんですけど、山越グラウンドまで行くのに、友達を見てすごい大変だなと思って。学校からバスを出したりということができないのかな。」  
清水 「バスを出すまでいなくていいんですけど、近くにある松大のグラウンドを共同で使わせていただくとか、愛媛大学から徒歩で通える場所に移してスポーツの講義をしていただきたいなど。」  
鮎川 「考えなきゃいけない問題ではあるんだけど、非常に難しい問題でもあるわけです。例えば松大は立派なのを持っておられるけれども、私学には使用料をきっちり払わなくてはいけない。そういう問題が出てくるわけなんです。その辺を解決していくことが課題の一つではありますけれども、今のところは休み時間を30分にするといった解決の方法しかとれていません。」

清水 「来年から、その休憩時間が短くなる  
ということを知ったのですが。」

西頭 「そうなります。ただし山越の場合は、  
それを先生方に配慮して頂くように議  
論しています。ただし、法文学部には  
夜間主コースがあるでしょう。真ん中  
30分ずつ休みを取っちゃうと、最後が  
ずれ込むって問題もあるわけ  
です。夜間主の学生たちは女性も多い  
ですから、夜遅く9時半とか10時に帰  
るんでは非常に都合が悪いというこ  
とで、今は全体的な調整をしています。」



河野・山本センター委員

### 統一教科書を作ってほしい

豊田 「教科書が色々あって、先生によっ  
てばらばらで、英語の教科書は統一し  
てほしいです。」

西頭 「一回生は統一してやってます。た  
だ他の教科、例えばドイツ語でも同  
じ問題が出てくるんだろうけど、今  
はまだ手をつけていない。教養教育  
の主題別科目は個性的なものです  
から、あんまり統一っていうのは考  
えられないけれども、第二履修外国  
語とかは、今後検討しなきゃいか  
んなと思ってます。」

松久 「総合センターにカリキュラムを  
組む委員会がありましてね。そこ  
でいつも話題になっているのは今、  
豊田さんが言ってくれた、同じ言  
語であれば統一的なカリキュラム  
を組んで、成績の評価基準も統一  
して、それで授業を動か

していきべきだという意見です。な  
かなか大学全体としてこういう方  
向に足並みがそろっていないんだ  
よね。そこで、出来てるところと、  
出来ていないところと分かれて  
るんです。」

高松 「情報科学の内容については部会  
が、内容・スキルを統一して、担  
当の先生でやってくださいと揃  
えてあるんですね。けども、『揃  
いやすいもの』と『揃えな  
きゃいけないもの』と『揃  
えたらまずいもの』もあるわけ  
です。」

### 地域の人も学生も誇りに思える大学に

山村 「共通教育から離れるんですが、  
2006年から独立行政法人とな  
りますが、愛媛大学での取組は  
どうなっていますか。」

鮎川 「国立大学法人という形にお  
おそらくなると思っています。た  
だし、愛媛大学を、教育がきちん  
とでき、研究成果がどんどん上  
がっていくような大学にしたい  
という点では形が変わろうと変  
わるまいと同じことだろうと思  
っています。そのためにきちん  
とした特色がある研究も教育も  
出していけないといけない。そ  
れで、色んな学術的な研究セン  
ターもできてきている。教育の  
面でも、全国的にもかなりユニ  
ークな大学教育総合センターを  
作った。そういうことをきちん  
とやっていくことが、法人化に  
対する対応だと私は思っています。  
それは着実に進みつつあると  
私は思っています。」

先生方には、学外の方が誇りとし  
てくれる大学にしよう、頼りに  
される大学にしようよ、という  
言い方をしてるんです。誇り  
とするということは、あそこ  
には愛媛大学があって、愛媛  
大学ではこんなことしとるよ、  
ということをよそへ行って言  
うてくれるような大学にしたい  
ということですね。」

西頭 「もう1つ言えば、やはり皆  
さんも愛

媛大学を選んだ以上は誇りを持って、一生懸命勉強して、社会で活躍してくれたら嬉しい。我々はそれを願って一生懸命色々なことをやっているわけなんです。これは若干反省ですけど、地域に対しても社会に対しても、大学をPRするっていうのが、どこの大学でもあまり上手じゃない。今後その辺を改めていく必要があるんでしょう。私立大学はコマーシャル流してるところがありましたよね。」

### 大学での環境整備の現状はどうなっていますか

久田 「教育学部に所属していますが、寒い日だと、大講義室の授業はとても寒くて、先生達も我慢してやろうやっています (笑)。我慢しようって気持ちしかないんですね。」

鮎川 「大学全体として、大学の先生方の教育や研究に使う費用から、5パーセントを出してもらって、共通教育から環境を整えようと考えています。やはり環境をきちっとしないとだめです。私学はものすごくきれいですよね。そして、それぞれの学部では努力していただきたいとお願いしております。それからまた、国のほうから施設を建ててもらった時に可能性のある限り請合っているかと思っています。」

久田 「リフォームですよ。この前の地震のあと冷暖房とかじゃなくて。」

山本 「リフォームの計画もありますよ。順番にずーっとね。」

久田 「教育学部だけが冷暖房の設備がないんですよ。他の学部はあるんですよ。」

山本 「教育学部の大講義室の話ですが、時々朝行くと、スチームの栓が閉められているんです。」

西頭 「スチームあるでしょう？」

山本 「あります。」

鮎川 「あまり効かない？」

宮田 「近くにおる2、3人だけ」

山本 「人間一人が100ワットの熱を (笑)。冷房は大講義室にあります。他のところにはないですね。」

鮎川 「ない所がまだ随分あると思いますよ。」

松久 「法文学部の場合は学部の予算を集中的にかなりつぎ込んだんですよ。」

宮田 「その財政の流れとか、僕らは分からないですけど、どう振り分けられてるのでしょうか。」

松久 「それぞれの学部先生と学生の数に応じて予算がくるんですよ。その予算をどう使うかは各学部の教授会が決めるんです。」

高松 「共通教育の部分では、例の不評だった机と椅子をくっつけているものを取り替えて椅子と机が離れました。」

西頭 「17年度は大改装をかけますので、共通教育棟も見違えるようになってますよ。」

高松 「それから、かなりの部屋にAVプロジェクター、モニターなどの内部設備を整備しました。大講義室の横になっている机は工事を伴いますので、今年度は間に合いませんが、あれも劇場とまではいきませんが、良いのにします。」



二宮さん

### 教室のユニバーサルモデル

戸成 「先日、授業の関係で勝手に車椅子に乗って学内をうろうろしてみたんです」

が、バリアフリーという面でユニバーサルモデルを目ざした方が良いと私は思ってるんですが。その辺のことも17年の計画の中に入ってるんでしょうか？」

西頭 「17年度に大改装をやるから、そのときに恐らく入ってくるでしょう。」

高松 「どの建物もバリアフリーと大げさに言うほどではないけども、スロープはありますが。」

戸成 「付いてますけど、やはり端っこのほうに申し訳程度でしかついていません。のけ者にされてるみたいで、それはどうなのかなって。教室の中だって通路は狭いし、固定されてる机だと動けません。」

山本 「自転車などが通路に置かれていてです。これももう少しどうにかしないといけませんね。」

鮎川 「その問題は無視してるわけではなくてね。去年、共通教育に目の悪い方が入られて、先生方が全部見てまわって、外灯もつけました。学生さんに逆をお願いしたいのは、自転車なんかもそういうことを考えてきちんと置いて欲しい。その辺の考え方もお互いに直していかなきゃいけない部分はある。今、非常に貴重な指摘をもらったし、バリアフリーはこれからきちっとやっていかなきゃいかん。」

山本 「これは補足ですけども、バリアフリーという言い方にあてはまるかどうかは分かりませんが、僕がもった学生がノートテイクをやってくれる学生などを検討する組織を立ち上げて、少しずつ進めています。」

### キャンパスを居心地よくするためにできること

高松 「さっきもちょっと自転車が出ましたけど、大学の中の交通状況が無茶苦茶なんです。駐輪場がないから車も自転車も道路に置いてまして、非常に危な



左から江越さん、戸成さん、山村さん

いんですね。駐輪場がないからそういうことになってるんです。大学の中は自転車の走行を禁止したらどうかと思ってるんですけど。朝、ぎりぎり建物に一番近い所まで来て、どうしても玄関のところにはバアッと並ぶんですね。」

戸成 「私も個人的には自転車立ち入り禁止にすればいいと思ってます。バイクだけはきちんと駐輪場が確保されてるんですけど、自転車は散在してます。自転車、車両の乗り入れを全部禁止してしまえば、車にぶつかることないだろうし、自転車の放置もなくなるんじゃないかと思えます。」

山本 「共通教育棟の前のストリート、少なくとも自動車は止められないようにしないといけないんじゃないでしょうか。狭いですよね。」

松久 「大型車が荷物を運んでくるときに通れなくて困ってます。ゴミを収集する車の運転手さんがどけてようやく通れる。外部の人が見たら、この大学は一体何なんだろうと思うでしょうね。」

高松 「愛媛大学のキャンパスは、我々自身が自信を持ってここを見てくださいという風景がないんです。だいたい大学だったらきれいな写真がパンフレットに載るんですけども、愛媛大学で載っているのは正門の所くらいです。大講義室の前の空間に、休憩にこられた学

生さんが集まって色々な話をできたりするような場所を作りたいですね。道路を通っている高校生が、ああ愛媛大学っていいなあ、という感じに思ってくれる所が外から見えなきゃいけないあと考えています。」

鮎川 「情報処理センターと工学部の間に、工事がすんだら学生さんが憩う場所を作りたい。そして学外の人も、向こう側の門を開けたら入って来れるので、大学と親しめる場所にしたいなという計画もあるんですよ。」



豊田さん

### 学生と教職員のパートナーシップを

西頭 「どんなにきれいな施設を作ってもゴミをバアッとやっちゃうと同じになるのね。学生部の前は職員が朝掃除してるんですよ。でも、それではおいつかないわけね。学生の皆さんも参加して一人が1つずつ拾うだけでもかなり変わる。そういうことを企画する、考えていく必要があるのかなと思ってる。ボランティアグループの人たちだけが掃除してるだけでは寂しいなと思います。」

鮎川 「学生祭に、エコプロジェクトという企画に、さっき言ったプロジェクト費を出して研究してもらいました。あの

プロジェクトをただで、実際に学生祭のゴミが半減したんですよ。だからやればできるんだなということが分かった。継続的にずっと続くと嬉しい。その辺は学生さんも一緒になって考えていく必要があるんじゃないかな。」

西頭 「掃除も、講義も学生さんと一緒になってやっていきたいということです(笑)。」

松久 「やはり最後は、学生さんと協力関係、良いパートナーシップを作っていけば、そういう問題はもうすこしスムーズに解決するでしょう。こちらから一方的にやりましょうと言ってもなかなか、皆さんあいしませんからね。

今日は、僕らもちょっと思いつかないような意見をモニターの方から出してもらいました。久田くんが出してくれた学生主体の授業のあり方、双方向型の授業、チュートリアルな授業のモデルはあるんですが、実践している授業は全国的にも少ないので、それを愛媛大学でやっていくということは大変面白い発想だと思います。我々としても、一緒にいろんなことに取り組めていけたら良いなと思います。どうも皆さん長い間ありがとうございました。」  
(テープおこしは、豊田さんと戸成さんが担当してくれました。ありがとうございます。)



参加者全員で集合写真

## 特集2：愛媛大学キャンパスアメニティ調査

－法文学部人文学科地理学教室学生による調査報告

### I 調査方法

城北キャンパスを利用している学生自身がキャンパスについてどのように感じているかを調べるためにアンケート調査を行った。アンケート調査は、一次調査、二次調査の二度行い、一次調査は法文学部、工学部、教育学部の学生に対して行い104部の回答を得た。二次調査は一次調査の回答を踏まえ設問を作成し、3/19、20の二日間行い、272部（法文学部107、教育学部26、工学部97、その他の学部42）の回答を得た。

### II アンケート調査項目について

一次調査については自学部施設、他学部施設、オープンスペースについてそれぞれ快適・不快だと思う場所について自由に回答してもらい、それぞれ理由を書いてもらった。

二次調査は一次調査の回答で快適・不快双方で意見が集中した場所・事柄について5段階で評価してもらった。また、一次調査にて十分に調査できなかった駐輪場とキャンパス内の道路について五段階評価と理由を書いてもらった。

### III アンケート調査の結果

#### 1. 一次調査

一次調査は自由回答のためキャンパス内の様々な場所が挙がった。そのなかでも講義室は快適な場所としても、不快な場所としても学部を問わず多く挙がった。オープンスペースでは生協前の広場、図書館前の広場が同じように快適・不快双方ともで名前が挙がった。

またキャンパス内の駐輪場や駐輪のマナーなど、自転車に関する意見や、キャンパス内に駐車したり、走行する乗用車についての意見も多く挙がった。

この結果を受けて二次調査においては、多くの意見が挙がった講義室・図書館前の広場・生協の前の広場・駐輪場・キャンパス内の道路について調査することとした。

#### 2. 二次調査

##### ① 大学の施設は快適ですか（総合的に）？（第1表）

大学の総合的な快適性については、快適・やや快適と答えた人が不快・やや不快と答えた人の2倍となっている。しかし、どちらともいえないという人が最も大きな割合を占めている。学部別に見ると、教育学部において不快と感じている人が特に多くなっている。

第1表（単位は左：人 右：%）

	法文学部		教育学部		工学部		他の学部		全体	
快適	9	8.4	3	11.5	3	3.1	3	7.1	18	6.6
やや快適	40	37.4	7	26.9	33	34.0	17	40.5	97	35.7
どちらともいえない	41	38.3	6	23.1	40	41.2	13	31.0	100	36.8
やや不快	13	12.1	8	30.8	19	19.6	6	14.3	46	16.9
不快	4	3.7	2	7.7	2	2.1	3	7.1	11	4.0
合計	107	100.0	26	100.0	97	100.0	42	100.0	272	100.0



② 自学部の教室についてどう思われますか？（第2表）

自学部の教室については、やや不快・不快という回答が多かった。どの学部をみても講義室に対しては不快と感じている人が多く、教育学部においては快適と答えた人がいなかった。

第2表（単位は左：人 右：%）

	法文学部		教育学部		工学部		他の学部		全体	
快適	7	6.5	0	0	6	6.3	1	2.4	14	5.2
やや快適	30	28.0	2	7.7	16	16.7	11	26.8	59	21.9
どちらともいえない	29	27.1	5	19.2	28	29.2	10	24.4	72	26.7
やや不快	37	34.6	14	53.8	27	28.1	17	41.5	95	35.2
不快	4	3.7	5	19.2	19	19.8	2	4.9	30	11.1
合計	107	100.0	26	100.0	96	100.0	41	100.0	270	100.0

③ 図書館前の広場についてお聞きします。図書館前広場についてどう思いますか？（第3表）

快適・やや快適と答えた人が、不快・やや不快と答えた人の2倍強であった。学部別にみると法文学部は、快適・やや快適との回答が50%弱となっている。一方、法文学部以外では快適と答えた学生は少なく、どちらともいえないという回答が一番多かった。

第3表（単位は左：人 右：%）

	法文学部		教育学部		工学部		他の学部		全体	
快適	22	20.6	4	15.4	4	15.4	6	14.3	36	13.2
やや快適	30	28.0	5	19.2	5	19.2	12	28.6	76	27.9
どちらともいえない	29	27.1	15	57.7	15	57.7	18	42.9	111	40.8
やや不快	23	21.5	1	3.8	1	3.8	5	11.9	41	15.1
不快	3	2.8	1	3.8	1	3.8	1	2.4	8	2.9
合計	107	100.0	26	100.0	26	100.0	42	100.0	272	100.0

④ 生協前の広場についてお聞きします。生協前の広場についてどう思いますか？（第4表）

過半数近くの人が快適・やや快適と答えた。一方、不快・やや不快と答えた生徒は全体の四分の一にも満たない。学部別では、図書館前の広場に関する回答とは逆に、法文学部以外では快適という答えが過半数を超えている。

第4表（単位は左：人 右：%）

	法文学部		教育学部		工学部		他の学部		全体	
快適	10	9.3	3	11.5	5	5.3	8	19.0	26	9.6
やや快適	29	27.1	14	53.8	45	47.4	17	40.5	105	38.9
どちらともいえない	40	37.4	5	19.2	26	27.4	13	31.0	84	31.1
やや不快	23	21.5	3	11.5	18	18.9	2	4.8	46	17.0
不快	5	4.7	1	3.8	1	1.1	2	4.8	9	3.3
合計	107	100.0	26	100.0	95	100.0	42	100.0	270	100.0

⑤ 駐輪場についてお聞きします。現在の駐輪場は快適ですか？（第5表）

駐輪場については6割以上の人が不快と感じている。どの学部を見ても不快と感じている人は過半数を超えている。

第5表（単位は左：人 右：％）

	法文学部		教育学部		工学部		他の学部		全体	
快適	1	0.9	1	3.8	2	2.1	4	9.5	8	2.9
やや快適	9	8.4	3	11.5	15	15.5	5	11.9	32	11.8
どちらともいえない	32	29.9	8	30.8	21	21.6	7	16.7	68	25.0
やや不快	47	43.9	6	23.1	29	29.9	18	42.9	100	36.8
不快	18	16.8	8	30.8	30	30.9	8	19.0	64	23.5
合計	107	100.0	26	100.0	97	100.0	42	100.0	272	100.0

⑥ 学内（キャンパス内）の道路についてお聞きします。現在の学内（キャンパス内）道路は快適ですか？（第6表）

どちらともいえないという回答が多く、次いで不快と答えた人が多かった。しかし、快適と答えた人とはさほど差は見られなかった。各学部で見ると、法文学部において不快と答えた人が快適と答えた人の約2倍いる以外は、さほど特色は見られなかった。

第6表（単位は左：人 右：％）

	法文学部		教育学部		工学部		他の学部		全体	
快適	7	6.5	1	3.8	8	8.2	5	11.9	21	7.7
やや快適	12	11.2	7	26.9	17	17.5	14	33.3	50	18.4
どちらともいえない	48	44.9	12	46.2	47	48.5	10	23.8	117	43
やや不快	31	29	4	15.4	16	16.5	12	28.6	63	23.2
不快	9	8.4	2	7.7	9	9.3	1	2.4	21	7.7
合計	107	100.0	26	100.0	97	100.0	42	100.0	272	100.0

## IV 考察

現在の大学の施設については、快適・やや快適と約4割の人が回答している。しかし、どちらともいえないという回答も4割弱あったことから、学生は大学に対して必ずしも快適と感じているとはいえない。

### 1. 屋内について

最も不快との回答が多かったのは屋内についての設問である。講義室については学部を問わず不快と答えている人が多い。特に教育学部と共通教育棟は建物が古いという意見が多く、ドアの立て付けの悪さや構造上の問題、エアコンの未整備、照明の暗さ、連結機の使いにくさについてなど設備面を指摘するものが多い。トイレが汚いという意見も聞かれた。喫煙スペースについては喫煙者と非喫煙者から異なった意見があげられた。喫煙者は更なるスペースの確保を望んでいるが、非喫煙者からは現在の喫煙スペースは近接する研究室内に煙が流れ込むなどの不満の声もある。

## 2. オープンスペースについて

二次調査において、図書館前の広場を快適と感じる人の割合は法文学部に多かった。一方生協前の広場については、法文学部以外では快適という回答が過半数を超えていた。これは、図書館前の広場は法文学部に最も近く、法文学部の学生の利用頻度が多いためと思われる。実際、教育学部や工学部の学生にアンケート調査をした際、図書館前の広場を利用したことはないという意見が多数聞かれた。

生協前の広場は、図書館前より狭いものの快適と感じている人が多く、学部を問わず生徒の利用する頻度が高い。これは近くに生協ショップ・生協食堂があり、利便性が高いためであろう。また、自動車・自転車の進入を禁止しており、歩行者が安心して歩けることも理由の一つであると考えられる。反面、昼食時はキャンパス内で学生が最も集中する場所であり、大変混雑する。そのため不快と感じている人も多い。

その他、どの学部も自学部に隣接するオープンスペースを快適な場所とする回答が多数聞かれた。これは移動に時間がかからず利用しやすいことがその理由と考えられる。

また、授業以外の時間にくつろげる場所が少なく、屋外では図書館前、生協前などに多少見られるものの、雨天の場合はくつろげるスペースがさらに限られるため、屋外にある設備に屋根を整備して欲しいという意見も多くみられた。

## 3. 駐輪場について

駐輪場に対しては、学部を問わず不快と感じている人が多い。その理由として、駐輪場が自転車の量に対して狭いこと、屋根付きの駐輪場が少ないことなどが挙げられた。こういった駐輪スペースの狭さに起因して、駐輪マナーの悪化が生じ、歩行者・乗用車の邪魔になるという弊害を生んでいる。さらに、明らかに放置と思われる自転車が多数存在し、より駐輪スペースを狭めている。また、バイクの駐輪場へ屋根を取り付けて欲しいという意見もみられた。

## 4. キャンパス内の道路

キャンパス内の道路に関しては、特に法文学部に不快と感じる学生が多かった。

法文学部講義棟前の道路は、自動車の唯一のキャンパス入り口である正門に近いこと、交通量が多い。また、歩道が整備されていないこと、路上に自転車を駐輪していること、駐車場の不足による路上駐車の問題などが悪状況を生み出している。そのために歩行者、自転車、乗用車が互いに接触する危険が高い。(第1図)

また、西門と裏門にあるバイク止めポールが自転車の通行の妨げになっていることに対する不満も多数聞かれた。(第1図)

## V 改善策・提言

こうしたさまざまな問題点を踏まえ、最後にキャンパスライフをより快適なものにするために対策・提案を挙げたい。

第一に、屋内及びオープンスペースについては、上記の設備面の改善と、喫煙場所に関する問題を検討する必要がある。現在屋内の喫煙所は各階に一ヶ所ずつ配置されているが、近接する室内に煙が流れ込むなどの問題を解決するためにも、換気設備を徹底させるか、講義棟内全面禁煙

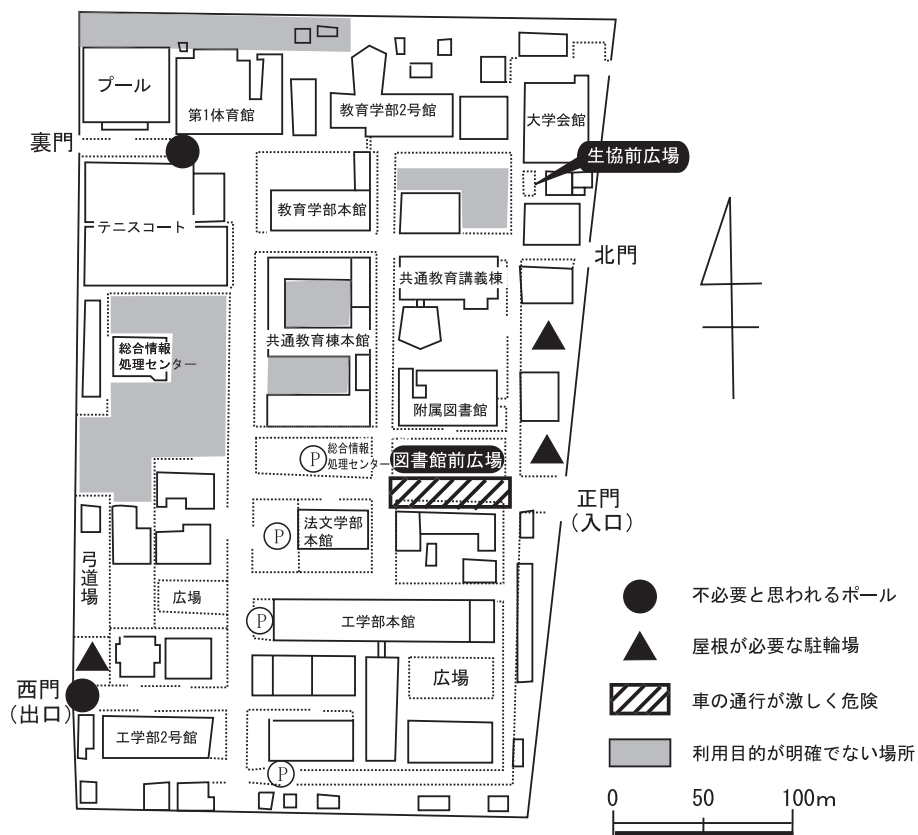
などの思い切った策が必要であると考えられる。また、雨天時利用できるくつろぎの場が少ないため、屋外にも屋根のある憩いの場が欲しいとの意見が多数上がった。コンサート、展示などができるホールが欲しいという声もあったため、それらの意見を汲んだ多目的ホール・スペースを設置することで、アメニティ向上につながるのではないだろうか。

第二に、キャンパス内の交通に関しては、諸々の問題は駐輪・駐車場の不足に起因すると考えられる。しかし、限られた敷地内でそのようなスペースを増設することは困難である。よって、キャンパス内の自転車・自動車の数を減らすことを考えるべきではないだろうか。具体的な対策としては、放置自転車の撤去や、それらを構内の貸し自転車として利用するなどの施策なども考えられる。また、自動車の進入禁止路を増やしたり、自動車の入構規制を強化し、教官の乗り入れに関しても公共交通機関の利用を促してはどうだろうか。

第三に、キャンパス内の景観を考える上でも、空間の利用目的を明確化し有効に利用すべきである。キャンパス内には手入れをしていない、無駄な空間が多く存在する。車が止まったりもしているが、ベンチやゴミ箱を設置して、管理をしたり、緑地を整備したりすることで憩いの場所としても利用できそうでもある。(第1図)

最後に、キャンパスライフがいかに快適かどうかは、学生自身が一番わかっていると思われる。そこで、インターネットなどを利用し、学生からいろいろな意見・要望を集めるようにしてはどうだろうか。学生と学校が相互に意見を交換し合える環境をつくること、学生が積極的にキャンパスづくりに参加しやすいシステムをつくることが重要であると思う。

今回の調査は簡単なものになったが、今後の城北キャンパスがより良くなっていくためのきっかけになればと思う。



第1図 キャンパス内で改善が必要と思われる箇所の位置  
(聞き取り及びフィールドワークより作成)

## 特集3：平成14年度愛媛大学大学教育総合センターの新体制

大学教育総合センターは平成14年4月より、文部科学省の省令施設となりました。このことを受けて、本センターは組織の見直しを行い、新しい体制によりすでに活動を開始しております。以下に新体制における教員スタッフを紹介します。

### 大学教育総合センター運営委員会委員

センター長 西 頭 徳 三 (副学長・運営委員会委員長)  
 副センター長 松 久 勝 利 (共通教育企画・実施部長)  
 副センター長 真 鍋 敬 (英語教育センター長)  
 副センター長 山 本 久 雄 (教育システム開発部長)

学 部	第13条第1項第4号委員		第13条第1項第5号委員
	教務関係委員会の委員	その他	センター長推薦
法文学部	井 藤 正 信	清 水 史	赤 間 道 夫
教育学部	山 崎 哲 司	村 尾 卓 爾	山 本 久 雄
理学部	佐 藤 成 一	真 鍋 敬	林 秀 則
医学部	鳥 居 本 美	中 村 慶 子	前 山 一 隆
工学部	井 出 徹	白 石 哲 郎	高 松 雄 三
農学部	高 瀬 恵 次	仁 科 弘 重	藤 原 正 幸
大学教育総合センターの専任教員			(第13条第1項第3号委員) 松 久 勝 利 佐 藤 浩 章

### センター自己点検・評価委員会

◎前山 一隆 (医・センター運営委員)  
 松久 勝利 (副センター長)  
 山本 久雄 (教・副センター長)  
 佐藤 浩章 (センター専任教員)

※ 以下、◎印は委員長を示す。

高松 雄三 (工・教育改革推進委員長)  
 真鍋 敬 (理・副センター長)  
 柳澤 康信 (理)

### センター教育改革推進委員会

◎高松 雄三 (工・センター運営委員)      前山 一隆 (医・センター運営委員)  
 松久 勝利 (副センター長)      真鍋 敬 (理・副センター長)  
 山本 久雄 (教・副センター長)      林 秀則 (理・センター運営委員)  
 高瀬 恵次 (農・センター運営委員)      佐藤 浩章 (センター専任教員)

### 共通教育企画・実施部に置く共通教育企画・実施部 企画委員会

◎松久 勝利 (共通教育企画・実施部長)      赤間 道夫 (法・センター運営委員)  
 山崎 哲司 (教・センター運営委員)      林 秀則 (理・センター運営委員)  
 野田松太郎 (工・第11部会部会長)      遠藤 克彦 (法・第2部会部会長)

### 共通教育企画・実施部に置く共通教育企画・実施部 実施委員会

共通教育企画・実施部長	松久 勝利 (セ)	副センター長
センター運営委員会委員	白石 哲郎 (工)	
	仁科 弘重 (農)	
第12条第1項に規定する 各部会の長	大西 秀臣 (工)	第1部会長
	遠藤 克彦 (法)	第2部会長
	南 充彦 (法)	第3部会長
	大野 一郎 (理)	第4部会長
	佐伯 修一 (保)	第5部会長
	奥定 一孝 (教)	第6部会長
	パトリシア・ライオンズ (セ)	第7部会長
	宇和川耕一 (法)	第8部会長
	天野 要 (情)	第9部会長
	鶴川 是 (教)	第10部会長
	◎野田松太郎 (工)	第11部会長

共通教育企画・実施部実施委員会に置く部会

部 会	大学教育総合センター運営委員会委員	第11条第1項第1号～第3号の各イの委員
第1部会 (基礎セミナー)	西頭 徳三 松久 勝利 佐藤 浩章	◎大西 秀臣 (工)、井藤 正信 (法) 高橋 信雄 (教)、樋高 義昭 (理) 小林 直人 (医)、上田 博史 (農)
第2部会 (人間を知る)	清水 史 山本 久雄	◎遠藤 克彦 (法)、村上 恭通 (法) 松本 長彦 (法)、橋本 巖 (教) 秋山 智 (医)、重松 征史 (工)
第3部会 (社会を知る)	井藤 正信 山本 久雄	◎南 充彦 (法)、竹川 郁雄 (法) 松野尾 裕 (教)、松田 正司 (医) 前川 尚 (工)、松岡 淳 (農)
第4部会 (自然を知る)	林 秀則 白石 哲郎 藤原 正幸	◎大野 一郎 (理)、高岡 大輔 (教) 栗木 久光 (理)、加納 誠 (医) 遠藤弥重太 (工)、渡邊 政広 (工) 杉森 正敏 (農)
第5部会 (健やかに生きる)	村尾 卓爾 前山 一隆 中村 慶子	◎佐伯 修一 (保)、宇高 順子 (教) 山本万喜雄 (教)、三木 哲郎 (医) 海老原 清 (農)
第6部会 (こころ豊かに生きる)	清水 史 松久 勝利	◎奥定 一孝 (教)、西 耕生 (法) 村上 恭通 (法)、横山 詔八 (教) 牛山真貴子 (教)、佐藤 栄作 (教) ルース・バージン (留)
第7部会 (既習外国語)	佐藤 成一 真鍋 敬 高瀬 恵次	◎パトリシア・ライオンズ (英)、ロナルド・マーフィ (法) 林 康次 (法)、ロジャー・デイビーズ (教) 仲井 清眞 (工)、アニー・マーロウ (英) マーク・スタッフォード (英)、折本 素 (英)
第8部会 (未習外国語)	赤間 道夫 林 秀則	◎宇和川耕一 (法)、池 貞姫 (法) 柳 光子 (法)、菅谷 成子 (法) 秋谷 裕幸 (法)、寺下 太郎 (農)
第9部会 (情報科学)	高松 雄三 仁科 弘重	◎天野 要 (工)、岡本 直之 (法) 平田 浩一 (教)、中川 祐治 (理) 井上 章二 (農)
第10部会 (スポーツ・健康科学)	山崎 哲司 村尾 卓爾 中村 慶子	◎鶴川 是 (教)、井上 誠治 (教) 陶山 啓子 (医)、山田 寿 (農)
第11部会 (専攻別基礎科目)	佐藤 成一 鳥居 本美 井出 敏	◎野田松太郎 (工)、岡本 俊明 (教) 野倉 嗣紀 (理)、絹谷 政江 (医) 疋田 慶夫 (農)

※ 第11部会のオブザーバー 吉井 尚 (理)、東 長雄 (理)

### 英語教育センター運営委員会

英語教育センター長	◎真 鍋 敬	
大学教育総合センター 英語教育担当専任教員	ジェイスコット・アーカンブラック	折 本 素
	リチャード・ブライト	
センター運営委員会委員	佐 藤 成 一	高 瀬 恵 次
第7部会（既習外国語）部会長	パトリシア・ライオンズ	
英語教育センター長が指名する 英語教育センター研究員	ロジャー・ジョン・デイビーズ	
	柳 澤 康 信	

### 英語教育センターに置く研究員

教育学部 教授 ロジャー・ジョン・デイビーズ  
 理学部 教授 柳 澤 康 信  
 法文学部外国人教師 マーフィ・ロナルド・ポール

### 教育システム開発部運営委員会

教育システム開発部長	◎山 本 久 雄	
大学教育総合センターの 専任教員	松 久 勝 利	
	佐 藤 浩 章	
センター運営委員会委員	林 秀 則	
	中 村 慶 子	
	高 松 雄 三	
第9条に規定する 各委員会の長	山 本 久 雄	ファカルティ・ディベロップメント 委員会委員長
	井 出 徹	キャリア教育委員会委員長
	花 熊 暁	障害者学習支援委員会委員長
	樋 口 康 一	社会人学習、生涯学習委員会委員長



教育システム開発部に置く部門の委員会

ファカルティ・ディベ ロップメント部門	ファカルティ・ ディベロップメ ント委員会	榎林 建司 (法)、 渥見 秀夫 (教) 井内 美郎 (治)、 松田 正司 (医) 高松 雄三 (工)、 木場洋次郎 (農) ◎山本 久雄 (教育システム開発部長) 松久 勝利 (センター専任教員) 佐藤 浩章 (センター専任教員)
学習支援部門	キャリア教育委 員会	井藤 正信 (法)、 小林 資忠 (教) 榎原 正幸 (理)、 加藤 基子 (医) ◎井出 徹 (工)、 森本 哲夫 (農) 山本 久雄 (教育システム開発部長) 松久 勝利 (センター専任教員) 佐藤 浩章 (センター専任教員)
	障害者学習支援 委員会	丹下 晴喜 (法)、 赤間 道夫 (法) ◎花熊 暁 (教)、 遠山 鴻 (理) 大西美智恵 (医)、 藤井 雅治 (工) 勝山 邦久 (農) 山本 久雄 (教育システム開発部長) 松久 勝利 (センター専任教員) 佐藤 浩章 (センター専任教員)
	社会人学習、生 涯学習委員会	◎樋口 康一 (法)、 井上 彰 (法) 山崎 哲司 (教)、 山田 誠 (教) 吉井 尚 (理)、 門脇 千恵 (医) 矢田部龍一 (工)、 中安 章 (農) 山本 久雄 (教育システム開発部長) 松久 勝利 (センター専任教員) 佐藤 浩章 (センター専任教員)

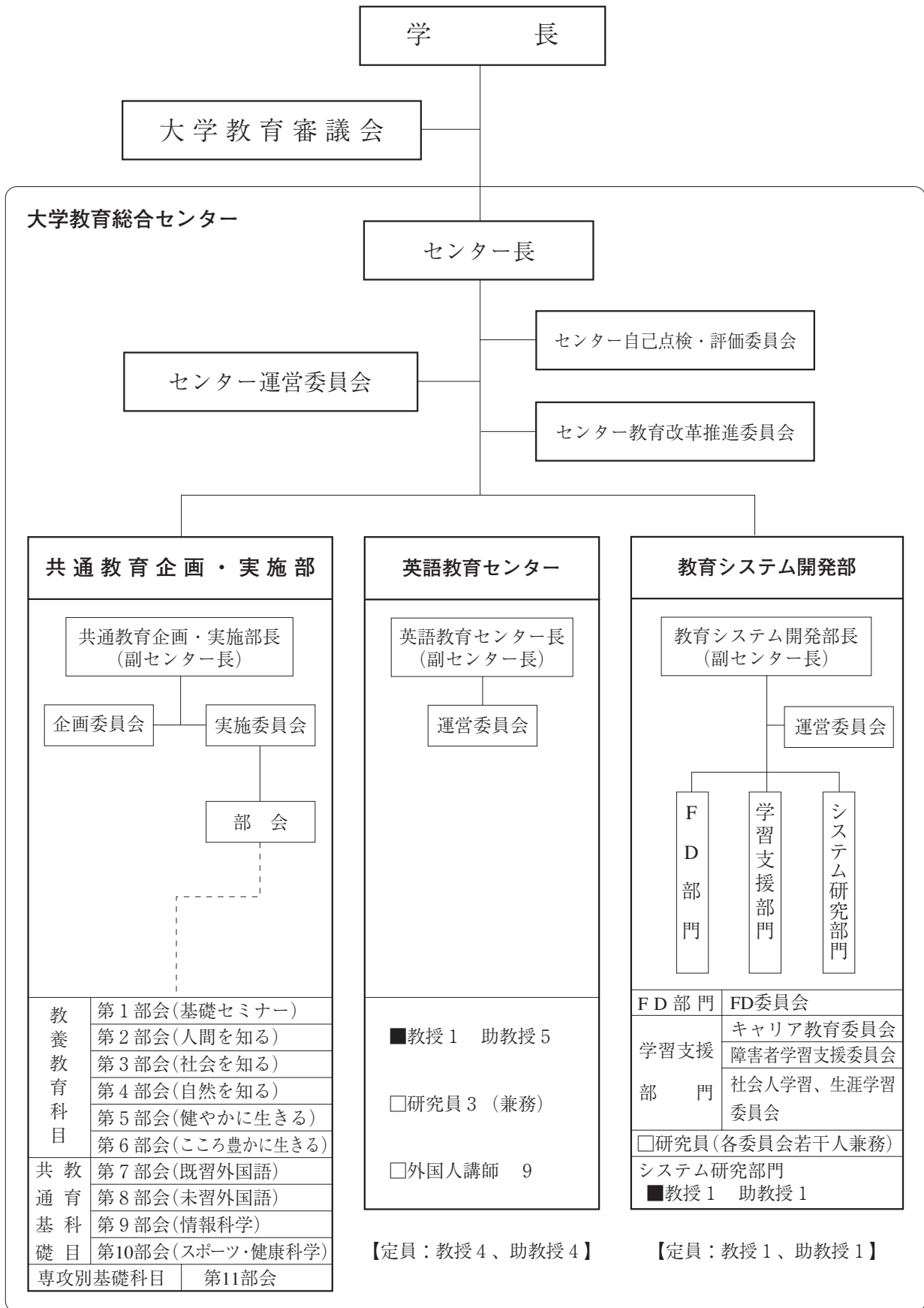
大学教育総合センター運営委員会に置く小委員会

小委員会の名称	担 当 事 項	委 員 員
組織・規則小委員会	組織、規程・内規	◎林 秀 則 赤 間 道 夫 白 石 哲 郎 松 久 勝 利
予 算 小 委 員 会	予算の要求及び配分基準	◎高 松 雄 三 松 久 勝 利 林 秀 則 佐 藤 浩 章
広 報 小 委 員 会	広報	◎松 久 勝 利 山 本 久 雄 中 村 慶 子 佐 藤 浩 章
施設・環境小委員会	施設・環境の整備計画	◎井 出 徹 井 藤 正 信 山 崎 哲 司 佐 藤 成 一 松 久 勝 利

大学教育総合センターの専任教員

所属部局	職 名	氏 名
教育システム開発部	教 授	松久 勝利
	講 師	佐藤 浩章
英語教育センター	教 授	Jay Ercanbrack
	助 教 授	Ann Marlow
	助 教 授	Mark Stafford
	助 教 授	Patricia Lyons
	助 教 授	Richard Blight
	助 教 授	折本 素
	助 教 授	Ronald Murphy

# 愛媛大学大学教育総合センター組織図



## 編集後記

- # 「大学教育総合センターだより」第3号をお届けします。今回は学生の活動を中心に特集を組んでみました。教育は教員と学生のパートナーシップにより成り立ちます。一連の活動を見守った一人として、教育のこの基本を再確認したように思います。
- # 大学教育総合センターとしては、学生とのパートナーシップをもっともっと促進したいと考えています。このため4月より、これまでの「学生広報モニター」という制度を、もっと自主的に活動してもらう方向に改めました。活動内容を基本的に学生スタッフに委ねる方式として、有志による自主的なサークル「愛媛大学学生メンターズ」(Ehime University Students Mentors Organization 略称 ESMO)が発足し、活動を開始しています。ESMOの活動に注目を。
- # 本学は松山の中心地にキャンパスがあるという、絶好の地理的条件に恵まれています。半面、キャンパスの狭さがネックとも言われがちですが、そのことを踏まえた土地の有効利用がなされているか、問題です。今回は人文学科の地理学教室の学生諸君にキャンパスアメニティについての試行的調査をお願いしました。誌面の都合で要約的な報告とせざるをえず、学生諸君にはご迷惑をかけました。キャンパスアメニティは学園生活の重要な要素ですから、今後も学生の視点からの提言を取り上げていきたいと思えます。
- # 新学期がスタートしましたが、大学教育総合センターでは新体制が固まり、次年度の授業計画作成に向けた動きが早くも始まっています。また、平成16年度をメドとした国立大学法人化への動きも加速していくことになりそうです。教育に休止は許されないようです。
- # 広報は本学にとって大切な社会への窓です。担当者としては、進化する広報を目指して、関係各方面と連携してより良いかたちを模索したいと思っています。センターニュースでも取り上げましたが、これらの流れを受け、「センターだより」は次号より新たなスタイルで刊行いたします。ご期待ください。

□ 絵：

『世』 教育学部学校教育美術専修 4回生 山口 綾子